

Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeons

第 2 回会議報告

日時：2023 年 7 月 1 日

場所：京王プラザホテル本館 42 階 「御岳」

参加者（敬称略）：

日本（10 名）

遠藤 格（横浜市立大学）、調 憲（群馬大学）、楊 知明（京都大学）、小齊侑希子（福岡東医療センター）、沖永裕子（都立駒込病院）、石井範洋（群馬大学）、松尾泰子（奈良県立医科大学）、前川 彩（がん研有明病院）、梅澤早織（聖マリアンナ医科大学）、原 貴信（長崎大学）

韓国（7 名）

Jae Hoon Lee (Asan Medical Center), Hee Joon Kim (Chonnam National University Hospital), Seok-Hwan Kim (Chungnam National University Hospital), Sung-Hyun Kim (Severance Hospital), Yoo Jin Choi (KOREA University Anam Hospital), Sang Hyun Shin (Samsung Medical Center), Yun Kyung Jung (Hanyang University Medical Center)

6 月 30 日から 7 月 1 日にかけて京王プラザホテルで開催された第 35 回日本肝胆膵外科学会総会にあわせ、韓国肝胆膵外科学会（KAHBPS）より Educational Committee のメンバーが多数来日されました。Rising star session をはじめ各所でご発表いただいた後、新宿の町並みが一望できる素敵なフロアにて第 2 回の Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeons が開催されました。司会は松尾泰子先生が務められまし

た。長く続いた COVID19 の影響もあり、実は日本側の Next Generation Project (NGP)メンバーが一同に揃うのも初めてでしたが、白熱した質疑応答で予定していた 1 時間はあっという間に過ぎてしまいました。



会議中の様子①

・ **The HBP trainees – How we train ourselves (Dr. Yukiko Kosai)**

小齊先生より日本の肝胆膵高度技能専門医取得のために必要な要件、若手医師の経験症例数の実際、手術に臨むための準備、術後の手術記録とスケッチ、各地で開催されている学会主催のセミナーについて紹介がありました。

- ・ 経験症例数は施設ごとに大きく異なること
- ・ 術後の詳細な手術記録とスケッチが求められていること
- ・ 肝胆膵外科に限らず、他の学会や施設毎など様々なセミナーが開催されていること

を要点としてあげていただきました。韓国の先生方は、高度技能専門医の申請に際して
スケッチを詳細に書かなければならないことに驚いておられました。

・質疑

未編集ビデオの提出について、6時間もかかるようなビデオをどのように評価している
のか、大変な労力ではないかという質問がありました。

>これに対して遠藤先生、調先生とも大変だと口を揃えてお返事された上で、編集ビデオのみではうまく行かなかった手技が隠れてしまうかもしれないこと、出血時の対応を見たいのに頭が邪魔で見えないため評価できない場合があることなどのコメントを頂きました。

日本ではどれくらいの期間、あるいは症例数の第一助手を経験してから若手が執刀を経験することができるのか、という質問がありました。

>施設間で様々のようですが、必ずしも第一助手の経験を経ていないことが、NGPメンバーより回答されました。第一助手は Supervisor が努め、若手は第2助手に入ること、そしてそこから執刀医のポジションに移っていくことも多いようです。

ここで「Supervisor」という言葉についてどういう意味かと質問がありました。

>基本的に Professor が執刀し、自分がその責任を負う韓国に対して、日本は手術の場

において執刀医とは別に手術の責任者が存在し、それが Supervisor であること、supervisor は教授が務める機会も多いことが説明されました。遠藤先生が自分で手術するほうがよっぽど気が楽だとお話された際には、韓国の先生方からも笑みがこぼれていました。



会議中の様子②

• Educational seminar in Korea (Dr. Hee Joon Kim)

続いて Dr. Hee Joon Kim より韓国における肝胆膵外科への道のりと、2017 年より開催している若手肝胆膵外科医を対象とした educational seminar の内容について紹介がありました。肝胆膵外科への道のりについては、第 1 回会議のレポートにまとめておりますので、参考にいただければ幸いです。

韓国肝胆膵外科学会主催の若手を対象とした教育セミナーは、2017 年より開始されました。アンケートで手術手技向上のニーズが高かったことから初回はエキスパート

によるレクチャー形式でしたが、その後は受講者に積極的な参加を促す形式に変更となりました。休日返上でも参加したい！と思うような魅力的なプログラムを目指し、毎年様々なアイデアが取り入れられています。若手肝胆膵外科医からニーズの高いリサーチ、統計、プレゼンテーションの方法などは 2022 年以降別日のワークショップとして新たに発足しています。セミナーへの参加者が毎年増加していること、繰り返しの受講も多いことが成功の証ではないかと思いました。

・質疑

日本側から、レジデントの勤務時間に制限が設けられている中、どのように診療やリサーチを行っているのかと質問がありました。

>同日の Rising star session で肝移植を含む肝胆膵外科の臨床と、Basic research の成果を発表された Seok Hwan Kim 先生は、朝 7 時から夜の 11 時まで勤務していると話しておられました。Sustainability という点で日本と韓国が抱える問題点は同じなのだと再認識させられました。レジデントの勤務時間制限により、肝胆膵外科のフェローが最も忙しいようです。

遠藤理事長より、韓国における女性肝胆膵外科医の数が増加していること、その理由についての質問がありました。

>韓国の先生方は医学部学生の女性比率が増加していること（およそ半分）を理由の一

つにあげられていましたが、この傾向は日本も同じであると思います。女性外科医、さらには女性肝胆膵外科が増えた理由の解明と実現に向けた取り組みは、今後の課題の一つです。

さらに日本側女性医師より、韓国では家事・育児と仕事をどのように両立しているのかについて質問がありました。

>韓国の committee の女性医師は結婚しておらず、答えられる人がいないとの返答でした。修練を終えると比較的若年で professor になるため、それから結婚する医師もいるとのことでした。

日本では執刀医をどのように決めているかとの質問がありました。

>各施設により異なるが、通常は教授あるいは Supervisor を務める医師が症例を割り振ることが多いこと、緊急手術の場合には担当した医師がそのまま執刀する機会が多いことをお話しました。韓国は小さな国家であるため、地方からでも容易に都市部の施設にアクセスすることができます。その結果、「〇〇先生に手術をお願いします」と言って患者が都市部に集中し、症例数の偏在が起きているとのこと（ちなみに執刀医の指名料は無料だそうです）。その先生が執刀せざるを得ないため、若い先生が執刀する機会が少なくなっているようでした。そこで韓国の Educational committee は施設間の短期留学（2週間程度）の制度を設け、手術手技や周術期管理を地方の病院にしながら学ぶことのできるシステムを作りました。ロボット手術の導入などで実際に役に立っている、何度か学びに行っているとの声が聞かれました。また、参加者同士あるいは Educational

committee の中で顔の見える関係が構築されたことで、手術を希望して都市部に来られた患者さんを、地方の病院へ戻す（地元の病院で手術してもらう）機会も増えてきているとのことでした。



第2回ミーティング終了後、記念撮影

会議終了後の同日夜に、情報交換会を開催しました。今回、昼のミーティングでは十分な時間が取れませんでした。情報交換会では日韓でのコラボレーションの案をいくつか話し合うことができました。また、肝胆膵高度技能専門医を取得した後のキャリア形成や各施設での役割について、韓国において professor がどのような役割を担ってい

るのか、病院受診事情、お金の話、家族の話など様々な話題で情報交換を行うことができました。ちなみに最近韓国でもアサヒビールの生ジョッキ缶が発売され、大変品薄なようです。近日訪韓の予定がある先生方はお土産にいかがでしょうか。

非常に魅力的な KAHBPS のメンバーと、今後もお互いに協力、刺激し合いながら肝胆膵外科の魅力を若い先生方に伝えられるよう活動していけたらと考えています。

文責：原 貴信（長崎大学）